
花の雫。

海田 陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の雫。

【Nコード】

N7058C

【作者名】

海田 陽介

【あらすじ】

大学を卒業してから小さな植栽関係の会社で働いているわたしは、過ぎていく毎日に、寂しさのような、物足りなさなのようなものを感じている。ある日、わたしがいつものように植物の世話をしていると、会社の先輩が彼女に声をかけてくる。そしてふとした会話の流れから、その先輩の口から、花にまつわる、ある少し哀しい過去が語れることになる。その先輩の話す少し哀しい花のエピソードに耳を傾けているうちに、わたしもふと過去の花にまつわる記憶を思い出す。ふたつの花の記憶は次第に重なりあってわたしの心のなか

で静かな変化が起っていく・・・。

花の記憶

みんな今頃何をしているんだろうな、と思った。

社会人になってからは自由になる時間が少なくて、なかなか学生のときのように友達とどこかへ一緒に遊びに行ったりすることができない。仕事が忙しくて毎日がそれだけで終わってしまう。休みの日は仕事疲れで一日寝ているようなことが多いし、余裕があるときでも彼氏とデートしたりすると、もう他に時間は残らなくなってしまう。

自分のなかに、何に対するというわけでもないのだけれど、漠然とした、不満のような、寂しさのような、そんな感情があった。

ふと、パソコンの画面に向かっていた手を止めて、すぐとなりにある窓の方へ視線を向けてみる。するとそこには、どんよりとした灰色の雲が見えた。目に映る視界全体が、空の色素が薄く溶けだしたような灰色に染まってしまっている。

雨が降るのは時間の問題かもしれないな、と思った。

「小西さん」と、声がした。ぼんやりとしていたから少し驚いて振り向くと、そこには課長の島崎さんが立っていた。度の強い眼鏡をかけた、ひげの濃い、やせ形の男のひとだ。髪型はいつも綺麗に七分けにしてある。かつらみたいな髪型だなあ、といつも思っていたのだけれど、そんなことはとても口に出しては言えない。訊いたことがないからわからないけれど、歳はだいたい四十歳を少しすぎたくらいに見えた。

「…これ、この前言ってた資料です。どうぞ使ってください」

軽く会釈して、その資料を受け取る。わたしがその資料を受け取ったことを確認すると、彼は無表情に自分のデスクの方へと戻って行った。

…あのひとはどうも苦手だな、と思ってしまふ。決して嫌なひととかではないのだけれど、仕事以外のことではあまりしゃべってくれないし、少し気まずく感じてしまふ。…というより、この職場全体の雰囲気はどこかよそよそしい感じだった。

べつにとりたてて嫌な人がいるわけじゃないのだけれど、みんな接し方が淡々としていて愛想がないのだ。いかにも仕事上のつき合いといった、広がりのない、狭く、閉め出されていつてしまふような閉塞感を感じてしまふ。そう感じてしまふのは、自分と年齢が近いひとがいなせいもあるのかもしれない。

わたしは去年大学を卒業して、この会社に入社した。庭のデザインや、植物を育ててそれを販売したりする小さな会社だ。従業員の数は全部合わせても三十人に満たないくらい。狭い世界だ。だからよけいに、対人関係がよそよそしいと息苦しさを覚えてしまふ。

学生のときのように人間関係が広がっていくようなことがないし、友達と呼べるようなひとと今のところいない。仲が悪いというわけじゃないんだけど。会えばちゃんと挨拶はするし、仕事中や、休憩時間に軽く世間話をしたりするようなことはある。年に何回か飲み会もあるし…。でも、それだけなのだ。それ以上に広がっていくことがない。

というよりも、それほど広げたいわけじゃないのかもしれない。よくわからないと思ってしまふ。…何だかみんな十歳も二十歳も年

上で、あまり友達という対象ではないのだ。

仕事自体は楽しい。わたしは昔から植物を育てたりするのが好きだったし、小さな会社だから、まだ若くて経験のないわたしにも庭のデザインとか大きな仕事を任せてくれる。人間関係さえ、割り切ってしまうえば、今の仕事はそれほど苦じゃないとも思っただけれど…。

急いでこの書類を作ってしまったないと、と焦った。お昼からは現場に行つて、細かい打ち合わせをしなくちゃいけないし、そのあとは今栽培している植物の手入れをしなくちゃいけない。そしてそれが終わったらまた会社に戻ってきて、見積もり書の作成だ。まだ他にも今日中に片づけてしまいたい仕事はたくさん残っている。…何だか仕事如山積みでうんざりしてしまう。今日は残業になつてしまふかもしれないな、と思った。

お昼を過ぎると、思っていた通り雨が降り始めた。激しくも降らなければ弱くも降らない雨で、その雨が淡い水色の上に、薄く黒を重ねたような色彩に空間を染め上げていく。空から落ちてくる水色の粒が、わたしが着ているレインコートの上を小魚のようにね回る音が聞こえていた。

何とか雨が降り出す前にうち合わせが終わって良かったな、とほっとした。雨のなか、庭作りの進行具合を業者のひとと一緒に確認していくのは何かと面倒な作業だ。とはいっても、雨のなか植物の世話をするのも、なかなか骨の折れる作業だけれど。

バラが、蕾をつけはじめていた。慣れないなか苦勞して育ててきたものだから、それが蕾をつけてくれると嬉しい。花が咲くのが楽しみだな、とわくわくした。

バラの蕾は、舞い落ちて来る透明な水の粒に微かにその身体を震わせながら、じっと空を見据えていた。それはもつと雨水が欲しいと望んでいるみたいにも見えたし、あるいはその見上げた空から太陽光が差し込んでくるのを心待ちにしているみたいにも見えた。

手を伸ばして、軽くその蕾に触れてみる。すると、やわかい感触があった。ソフトクリームみたいなふわっとした感触があつて、水に濡れているせいか、冷たく感じられる。

小学校の頃に、確か理科の実習だったと思うのだけれど、アサガオの種を植えたことがあつたのをぼんやりと思い出していた。他の同級生のアサガオはどんどん大きくなっていくのに、わたしのアサガオだけはある時期を境に成長を止めてしまった。

しばらくするとそれは茶色い、パサパサした紙みたいになって、触ると、ボロボロに崩れてなくなってしまった。みんなのアサガオは赤や青や黄色といった、色とりどりのきれいな花を咲かせていくのに、自分の鉢植えだけには何の花も咲かなかった。雑草すら生えることもなくて、そこはただの茶色い土を盛っただけの場所になってしまった。

何だかそれがすごく寂しくて、哀しくて、悔しくて、泣いてしまったのをよく覚えている…。蕾についた細かな水の粒は、そのとき零した涙を彷彿とさせた。

「どうだい？」

と、ふいに背後で声がした。

ふと振り返ってみると、そこには後藤さんが立っていた。やっぱりわたしと同じように黄色のレインコートを着て、ニコニコしながらこちらを見下ろしている。

後藤さんは、あともう少しで四十歳に手が届こうかというくらい、ちよつと小太りの男のひとだ。その口元にはいつもひとつこそんな微笑が浮かんでいる。どことなく学校の先生みたいな印象を受けてしまうのは、丸縁の眼鏡をかけているせいかもしれない。少し後ろに後退しはじめている生え際なんかは、その優しい雰囲気へのせい、滑稽というよりは、むしろチャーミングに感じられた。

後藤さんは、この職場のなかでわたしが一番頼りにしているひとだ。そして同時に、一番親しみやすいひとでもある。仕事を一から丁寧に教えてくれたのも、やっぱり後藤さんだった。

「どれ」と、言って、彼はわたしのとなりにながみこむと、わたしが育てているバラを興味深そうに観察した。そして何秒間の間黙ってそのままいたあと、横を振り向いてわたしの顔を見ると、
「うん。このぶんだときれいな花が咲きそうだね」と、言った。

そう言われると、嬉しくなってしまう。最初、嬉しくなってしまう。最初の頃は上手くいかなくて本当に苦労したのだ。一度、高価なバラの花を自分の不注意から全部枯らしてしまったこともあった。

「順調にいけば、明日にでも咲くんじゃないかな」と、後藤さんはつけ加えるように言った。

わたしはもう一度改めて、自分が育ててきたバラに目を向けてみ

た。明日ここへ着た頃にはもう花が咲いているのかもしれない、そう思うと、自然と気分は高揚した。

「…この仕事って世話とか色々大変だけど、こんなふうに分が育てた植物がちゃんと育ってくれると嬉しいですね」と、わたしは後藤さんの方を振り返りながらそう言ってみた。

すると、後藤さんは短く頷いて、「僕がこの仕事を続けていられるのはそれがあるからなようなもんだね」と、答えて、少し笑った。笑うと目尻に深い皺ができる。それから後藤さんはおもむろに立ち上がると、「僕が担当してる花、今、きれいに咲いてるんだ。今朝咲いたみたいんだけどね。見に来る？」と、言った。

わたしは、「もちろん、行きます」と、答えて、立ち上がった。

後藤さんはわたしの前を黙って歩いていく。わたしも黙って後藤さんのあとに続いた。後藤さんの作業場と、わたしの作業場は少し離れているのだ。個人個人持ち場のようなところがあって、それぞれがそれぞれの植物を担当している。後藤さんは一体何の花を栽培しているんだろうな、と思うと、ちょっとわくわくした。

後藤さんの受け持ちの花壇には、紫水色の花が咲いていた。見たことのない種類の花で、星の形を立てに細長くしたような花びらの中央に、ピンク色の色素がぼんやりとにじむように広がっている。花びらの紫水色の色彩は、目に冷たいような透き通った色をしていた。そのせいか、その花を見ていると、きれいだなと思うの同時に、何か哀しみに似た感覚を感じてしまう。

もつとその花をよく見てみたいと思って、わたしはその場にしゃがみこんだ。

「雪溶草っていうんだ」と、わたしのとなりから声が聞こえてきた。ふと振り返ってみると、いつの間にか後藤さんもわたしのなりしやがみこんで花を見つめている。その花を見つめる彼の瞳には、気のせいかもしれないけれど、何か失われてしまったものを見るような淡い光があるように思えた。

「ユキドケソウ？」と、わたしは彼の言葉を繰り返した。

すると、後藤さんは軽く頷いて、「ヨーロッパが原産の種の花でね、春の、ちょうど雪解けの季節に、川辺に咲く花なんだよ」と、説明してくれた。「雪解け水のせいなのかどうよくわからないけど、透き通るようなきれいな紫色の花が特徴なんだ。日本に来たのは明治のはじめ頃だけど、あんまり知られてないね」

わたしは後藤さんの説明に耳を傾けながら、改めて目の前に咲く紫水色の花を見つめてみた。見つめているうちに、今見えている視界のなかに重なるように、まだ所々に雪が溶け残る川辺に、春の初々しい日差しを浴びながら、どちらかというとき控えめに蕾を広げる花がふうつと浮かびあがってきた。

「今年から実験的にいれてみようっていう話になったんだよ」と、後藤さんは続けた。「実を言うと、この花をいれてみようって社長に提案したのは僕なんだ。日本ではあんまりなじみのない花だから、まだ受容があるかどうかわからないけど、個人的にちょっと思い入れがあつてね、それで前々からどうしても入れてみたかったんだよ」

この花に一体どんな思い入れがあるのだろうと思っただけで、口に出しては何も言わなかった。後藤さんの花を見つめる表情がいつ

もよりも真剣で、そんな真剣な表情を見ていたら、軽い気持ちで訊いてしまっただけなような気がしたのだ。

もう一度、目の前に咲く、可憐な感じのする花に目を向けてみた。花は雨に濡れて、たださえその涼しげな色彩をより一層涼しげな感じに見せていた。

そういえば雨が降っているのだ、と思った。そのことを今さらのように思い出した。雨が地面をやわらかく濡らしていく音と、自分が着ているレインコートを雨がパツパツと打つ音が聞こえている。その両方の音を、意識して重ね合わせるようにして聴いていると、それはとても美しい協奏曲のように感じられた。

そして、美しいのと同時に、ちょっと哀しい感じもする。

哀しみの花

…あのとき、わたしの鉢植えにだけアサガオが咲かなかったとき、自分でもびっくりするくらい、わたしは泣いてしまった。その理科の時間が終わったあと、声をあげて泣きはしないまでも、ずっと、涙を零していたような気がする。

…自分でも何がそんなに哀しいのかよくわからなかったけれど、涙はなかなか止まらなかった。周りの友達は気を使ってわたしに優しい言葉をかけてくれたけれど、でも、そんなふうに優しくされると、またよけいに哀しくなった。

理科の先生の呼び出されて、その先生の職員室がある理科室に行ったのは、確かその日の放課後だったような気がする。

理科室のとなりに、準備室も兼ねた先生の部屋があった。あときも雨が降っていて、教室にはその雨音が静かに響いていた。

わたしが職員室に入っていくと、先生は窓際に立って、ぼんやりと窓の外の景色を眺めていた。窓の外には花壇があって、そこに咲いている花を眺めているみたいだった。

先生はわたしが入ってきたことに気がつく、振り向いて、目元で優しく微笑みかけた。髪の毛の薄くなった、外見はもうほとんどおじいさんといった感じのする先生だ。後藤さんと同じようにまるぶちの眼鏡をかけている。

「…アサガオは残念だったなあ」と、先生は口を開くとそう言った。わたしは黙って軽く頷いてみせた。

「でもそういうこともあるもんだよ。気を落とすことはないさ。…」

植物は結構デリケートで気分屋なところがあるから、ちょっとしたことですぐ機嫌を損ねてしまうんだな。…先生もこれでも随分苦労したんだ」

わたしは何て答えたらいいのかわからなかったなので、黙っていた。

ぐるりと職員室を見回してみると、そこには理科の実験で使う色々なものが置いてある。顕微鏡、地球儀、分銅、よくわかり液体の入ったオレンジ色をした容器、ホルマリン漬けにされた、内蔵が露出している魚。それから人体模型、化石、水槽にはこの前授業で使ったメダカが気持ちよさそうに泳いでいた。採点の途中だったのか、先生の机の上には赤丸やバツ印のついた答案用紙が置いてあった。

わたしの視線のさきに気がついたのか、先生はにやりとひとの悪い微笑を浮かべると、「この前のテストひどかったぞ。二十点だった」と、言った。

わたしはその言葉に驚いてしまった。自分のなかではこの前のテストはよく出来たつもりだったのだ。「うそ？」と、わたしが声を上げると、先生は可笑しそうに少し笑って、「ウソだよ。よく頑張ったな。九十五点だった」と、言った。その言葉を聞いて、わたしは少しホッとした。花が咲かなかったうえに、テストまでひどかったら、あんまりだと思った。

「話ってなんですか？」と、わたしはふと思いついて訊いてみた。すると、先生は窓の外を指さして、「あそこに咲いている花」と、言った。

見てみると、そこには色素の薄い、黄色いの、きれいな花が咲いている。丸みをおびた花びらが可愛い印象を受けた。

「あの花の種を、小西和華さんにあげよう」と、言つて先生はこちらに向き直ると、わたしの手を取つてその手のひらを開かせると、そこに米粒程の小さな種を握らせた。

驚いたのは、その種子の色まで、淡く、透き通るようなきれいな黄色をしていることだった。まるでガラス玉みたいに見える。わたしが驚きと戸惑いでしきりに瞬きしていると、「その花はかなり神経質な性格をしてるから、ちゃんと花が咲くところまで育てるのがすごく難しい。だけど、その花が育てられるようになれば、あとは大概の植物は大丈夫になる。今回のアサガオみたいに枯れることもないだろうな」と、先生はからかうように言つた。

わたしは手のひらの上の種と、先生の顔を何回か見比べてみた。どうして先生がわたしにこの植物の種をくれたのかよくわからなかったのだ。そう思つて、わたしがそのことを尋ねようとすると、それを制するように先生の方が先に口を開いた。

「…もうだいぶ前のことになるな」と、先生はぼつりと呟くように言つた。

「生きていればもう今頃はずいぶん大きくなつていたんだけどね」
そう言つた先生の声はいくらか寂しげに空気を震わせていった。まるで外に降る雨に濡れてしまつているみたいに感じられた。

「小西さんによく似てるんだ。すごく花が好きな子でね、自分のお小遣いで花の種を買つてきては、大事そうにその花を育てたりしてたよ」

一体何の話をしているのだろうと思つて、わたしは黙つて先生の顔を眺めていた。

「…今から二十年ぐらいの前かな。先生にも子供がいたんだ。小西

さんを見てると、どうしてもその子のことを懐かしく思い出してしまっ

「先生はそう言う、口元で少しきこえない感じに微笑んでみせた。『恵っていう名前の子だったんだけどね』事故にあって、中学校に上がる前に死んでしまった」

わたしは先生が口にした事実の重さに、言葉が出てこなかった。何て言ったらいいのかわからなかった。しばらくの沈黙があって、その沈黙に吸い寄せられるように外からたくさんの雨音が入ってきた。そしてその雨音は部屋のなかで静かに弾けると、ほんの少し、部屋を冷たく湿らせていった。

「どうして死んじゃったんですか？」と、わたしは少し迷ってからそう尋ねてみた。尋ねてしまってから、やっぱり訊かない方が良かったかな、と思った。

「交通事故だったんだよ」と、先生はわたしの問いにそう答えた。

答えたときに、先生の顔の表面で、哀しみが、それとわからないほどの微かさで震えるのがわかった。

「居眠り運転でね、信号が赤なのに突っ込んできて、ちょうど横断歩道を歩いていたあの子ははねられてしまった。…まあ、そんなにスピードは出てなかったから、外傷はそれほどでもなかったんだけど、ぶつかったときに強く頭を打ってしまったってね、意識不明の昏睡状態になってしまった。いわゆる植物人間っていうやつだね。…苦しそうな表情を浮かべながら眠るあの子の顔をベットの側で見ながら、先生は何もしてあげることができなかった。…そのときはごく悔しかったし、辛かったね」

先生はそこまで話すと、わたしの方へ向けていた視線を、また窓の外の、花壇の方へ向けた。花壇に咲いた花は、強い雨に打たれて、今にも押しつぶされてしまいそうに見えた。

「でも、ずっとあの子の側についてるうちに、あの子が小さな声で何かを呟くのが聞こえたんだ。よく耳を傾けてみると、微かに花つてという言葉が聞こえてくる。…その言葉を聞いて思ったんだ。そうだ、花だ、って。何か彼女が喜ぶような花をプレゼントすれば、あーるいは彼女は助かるかもしれないって。…自分が花を育てて、それをプレゼントすれば恵は助かるかもしれないって」

先生は窓の外に視線を向けたまま、ゆっくりとした口調でそう語った。

「今から思えば、バカな話なんだけど、でも、そのときは結構本気でそう思っていてね、早速、花を育てることにしたんだ。…育てる花は、できるだけ扱いが難しいやつがいいと思った。その花が咲いたとき、何か奇蹟が起こりそうなやつがいいと思った。そして、そんな花はないかと色々図鑑を探してるうちに、やっと見つかったんだ。気温や、湿度や、水分、日照時間、そういった色んな条件がきれいに揃わないと、滅多に花を咲かせない花。…光輝草っていうんだけどね。その花の種を取り寄せると、すぐに栽培に取りかかったよ。でもやつぱり、なかなか難しかった。どんなに慎重に育てたつもりでも、すぐに枯れてしまうんだ」

わたしは手のひらを開いて、そのなかにある、透き通るように黄色い種子を眺めてみた。雨の色素がそのまま溶けだしたように暗く陰って見える室内で、手のひらのなかのそれはまるで太陽光の欠片みたいに思えた。

「でも、そうやって色々試行錯誤している間にも刻々と時間だけは

過ぎていく…気がついたら、娘が植物人間の状態になってから、もう三ヶ月が経とうとしていた。医者にもそろそろ覚悟をしておいた方がいいかもしれないというようなことを言われてね、内心、先生はすごく焦ったよ。早くしなければ…そんなときだった、やっと育てた花が順調に育ちはじめたのは。これは上手くいくかもしれないと思った。そして、何とか蕾をつけるところまではいったんだ」

不意に、広げた手のひらの隙間から、そこにあった種子がいくつか床に零れ落ちてしまった。種子が床に散らばる音と、雨音は、奇妙に重なりあって聞こえた。ふと気になって、先生の方を見してみると、先生はこちらを振り返って、零れた種子をいくらか寂しそうに眺めていた。そして、その場にしゃがみこむと、そこに散らばった種子を拾い集めて、再びわたしの手に握らせてくれた。

「ごめんなさい」と、わたしは思わず謝っていた。先生はそれについては何も言わずに、「この花は本当に気分屋だからね」と、言って、小さく笑った。そしてまたものように立ち上がると、まだそこに花が咲いていることを確認するように、窓の外に目を向けた。

先生の目は心持ち細められていて、それは何か哀しい光景を眺めているみたいにも見えた。

「…結局ね、花は咲かなかったよ」と、先生は言った。

「仕事に行って帰ってきてみたら、物の見事に枯れてしまっていた。ひよつとすると明日あたり咲くんじゃないかと思って楽しみにしていたところだったから、その落胆といったらなかった。…思えば、もつとよく日光を当てようと思って、変に日当たりのいい場所に移したのがいけなかったんだ。黄色かった蕾が茶色く変色して、空気

が抜いたみたいになんたりしてんだ。

「それからすぐあとだったな。娘が息を引き取ったのは。…あのときは自分の不注意が悔やまれたね。まるで自分の不注意から娘を死なせてしまったような気がした」

先生はそう語り終えると、しばらくの間黙っていた。わたしも黙っていた。

訪れた沈黙のなかを、粒の大きい、やや角張った雨音が流れすぎた。外に降る雨はまるで全てのものを押し流そうとしているみたいに見えた。雨を眺めているうちに、花壇に咲く花のことがだんだん心配になってきた。

「…花、大丈夫かな」と、わたしはポツリと言った。すると、先生はこちらを振り返って、「大丈夫だよ。一度咲いた花は、育てるのが難しいぶん、強いんだ」と、答えた。それから、

「…先生があの花をちゃんと咲かせることができるようになったのは、娘が死んでから一年くらいが経ってからだったな」と、言葉を続けた。「娘を死なせてしまったぶん、せめてこの花だけはちゃんと育てたいと思ってね。…色々苦労はしたけど、最終的には何とか花が咲かせられるようになったんだ。やっと花が咲いたときは、すごく嬉しかったね。嬉しいなんてものじゃなかった。宝石みたいにキラキラ輝いて見えたよ。でも、同時に、あのときこの花が咲いていればと思うと、ちょっと哀しかったりもしたね」

先生はそう言うと、□元の隅に、哀しみが淡く透けて見えるような微笑を浮かべた。

あの花が咲いていれば、先生の子供は助かっていたのかもしれない、わたしは先生の言葉を思考の上で反芻しながら、色素の薄い黄

色の花を眺めていた。花の上を流れ落ちていく、ほのかに青色の色素を含んだ水の滴は、先生の哀しみそのもののように思えた。

「まあ、昔のことさ」と、先生は過去への未練を無理に引きちぎろうとするようにそう言った。そして、「とにかく、この花を頑張つて育ててみなさい。育てるのが難しけど、そのぶん、花が咲いたとき、喜びが大きいし、もし何か願いごとがあればきつとそれは叶うはずだよ」と、先生は言った。

先生が倒れてしまったのは、その日から二週間も経たないうちだった。突然授業中に倒れたかと思うと、そのまま意識を失って重体になってしまった。原因は脳溢血だった。

先生の意識は一週間経っても戻らないままだった。

学校でも先生のためにみんなで何かをしようという話になって、千羽鶴を折ってそれをプレゼントしたりした。だけど、先生の意識が戻ることはないままだった。

そんなとき、わたしが思いついたのは、先生にもらった花を、光輝草を、育ててそれをプレゼントすることだった。自分ひとりだけの力で花を育てることができれば、先生の命を救うことができるような気がした。

わたしは早速、光輝草を育てはじめた。だけど、なかなか思うようには育ってくれなかった。芽が出たかと思うと、すぐにそれは枯れてしまったりした。そんなふうな状態がしばらくの間ずっと続いた。

でもやがてどうにか、ある程度の段階までは育てることができるようになった。後もう少して、蕾がつくだろうというところまでいった。でも、そこから先がどうしても難しかった。何度やってみてもそれ以上成長してくれないのだ。力を使い果たしたように途中で枯れてしまう。気がつくと、先生が倒れてからもう三ヶ月以上が経とうとしていた。

やっぱり、わたしには無理なのかもしれない、と思った。アサガオすら満足に育てることができなかったのだ。それがいきなり、花が咲くだけでも奇蹟のような植物を育てることなんて、最初から無理があつたのだ、とそう思った。いっそのこと、もう諦めてしまおうかとも思った。

だけど、先生のことを想うと、そういうわけにもいかなかった。花を咲かせることができないまま、先生も過去に子供を亡くしてしまっている。そう思うと、何とかしてこの花を咲かせたい、と強く思った。

でも、いくらそう思っても、結果はいつも同じだった。時間ばかりが流れていった。茶色く変色した植物の残骸は、先生の死をイメージさせた。枯れた植物に手で触れると、アサガオのときと同じように、ボロボロに崩れてなくなってしまうた。

冷たい風がその植物の破片をどこかへ運び去っていった。

花の想い

「…僕の妹がね、好きだった花なんだよ。この花は」

雨音と共に、後藤さんの声がゆっくりとわたしの意識のなかに広がっていった。

ちょっとびっくりしてとなりを振り向くと、後藤さんは少し可笑しそうに口元で笑って、「どうしたの?」と、訊いた。

わたしは口元で曖昧に笑って誤魔化した。それから、「妹さんが好きだったんですか?」と、取り繕うようにそう尋ねてみた。

すると、後藤さんは短く、うん、と頷いて、五秒間くらいの間何か物思いに沈むように黙っていた。それから、「僕がこの仕事に就いたのは、妹の影響が大きいんだ」と、言葉を続けた。「妹は植物が好きでね、家の庭で色んな植物を育てたりしてたよ。しまいには育ててる花のひとつひとつに名前をつけるぐらいの勢いでね」

後藤さんはそう言うのと、軽く笑った。微かに水気を含んだような笑い方だった。

後藤さんの妹ってどんなひとなんだろう、とわたしは勝手に想像を膨らませていた。きつときれいなひとなんだろうなあ、と思った。

「…子供の頃からそんな感じだったから、当然のように大学もそっちの方に進んだよ。ガーデニングとか、環境計画とか、そういう関係にね。そして大学を卒業すると、もっとそっちの方面の研究がしたいっていうことでイギリスの方に留学したんだ。…僕と違って、妹は結構優秀だったんだよ」

後藤さんはそう言うのと、苦笑めいた微笑を口元の隅に浮かべた。

雨音が優しく響いていた。雨音に合わせるように世界は透明な声で何かを歌っているように感じられた。その歌声はどうしてか哀しげに感じられた。目の前に咲く、紫水色の花は、雨に濡れてますますその色彩の美しさを際ださせていくように思えた。

「確か、妹が留学してから二年ぐらいが経った頃かな、僕は旅行も兼ねて妹を訪ねてイギリスにいったんだ。そのとき妹は大学の寮みたいなのところに住んでんだけど、その寮の彼女の部屋に、この花が飾ってあってね、すごくきれいな花だなあって思ったんだ。

訊いてみると、妹はつい最近スイスかどこかその辺に旅行に行ってきたらしくて、そこで偶然この花を見つけて、摘んできたらしいんだ。：日本に帰ってからその花のことが忘れられなくてね、色々調べて、実は日本でもこの花が栽培されてるっていうことを知ったんだ。そして実際に自分で育ててみたくなって、育てはじめたんだよ。

：それぐらいの頃からだね、僕が少しずつ植物に興味を持ちだしたのは。そのうち、どうしても何か植物関係の仕事がやりたくなつてね、それでその当時勤めていた会社を思い切って辞めると、花屋さんでアルバイトをはじめたんだ。そしてそこで長く働いているうちに、今のこの会社を紹介されて、就職したっていう感じでね…」

後藤さんはそこまで話すと、わたしの方へ視線を向けて、「…ごめん。こんな話退屈だね」と、言って、苦笑するように笑った。

わたしは首を振って、そんなことないですよ、と答えた。そして、もっと話を続けてください、と言った。すると、後藤さんはちよつと戸惑ったような表情を浮かべて、それから軽く頷くと、また花の

方へ視線を向けて何秒間の間黙っていた。そして、

「…妹が死んだのは、次の年の冬だったね」と、ポツリと告げた。

わたしは後藤さんの言葉があまりにも唐突に感じられて、後藤さんの横顔をまじまじ見つめてしまった。

「その年の冬がすごく寒かったのを今でもよく覚えてるよ。妹はもとも身体が弱かったから、その寒さがよっぽど応えたんだろうね。…風邪をこじらせて、肺炎にかかって死んでしまった…」

後藤さんはそう言くと、しばらくの間黙っていた。わたしも黙っていた。沈黙のなかで、ひとつひとつの雨音が大きく拡大されて聞こえた。

「…だけど、直接の原因はその寒さじゃないんだ。妹はちよつと無理すぎたんだよ。まだ風邪の治りきらない身体で、強引に研究を続けようとして、それであんなことになってしまった。…まあ、妹らしいといえば妹らしいんだけどね」

後藤さんの瞳をよく見てみると、花の紫水色の色彩と雨の色彩が重なり合うように溶け込んでいた。それは後藤さんの意識というリズムを通して、そこに現れた儚い光のように思えた。

「妹はイギリスの病院で息を引き取ったよ。…日本に連れて帰る間もないほど、あっけない死に方だった。雪の変わりに、恐ろしく冷たい雨が降る朝だったね」

そう言った後藤さんの声は、そのときの感情がそのまま凍りついて残っているみたいに寂しげに感じられた。

わたしは黙って、後藤さんの妹のことを考えていた。外国の、雨の日の陰鬱な光に濡れた薄暗い病室で、寒さに押し包まれるようにして死んでくということ、考えていた。

「妹が大学で研究していたのは、この雪解草だった。向こうで、妹の荷物とかを整理してたときに、この花に関する論文とか、データーだとか、文献だとかが一杯でてきてね。…なんだろう。そのときになつてはじめて泣いたよ。それまでは全然涙なんて出てこなかったのに、そのときになつて急に喪失感みたいなものが込み上げてきてね、妹が住んでた小さな部屋で声を出して泣いたんだ…」

後藤さんはそこまで話すと、ふとなりわたしがいることを思い出したようにこちらを振り返って、目元で哀しみを誤魔化そうとするように微かに笑った。そしてまた花の方へ視線を戻すと、「妹の部屋はひどく寒かったな。…泣いてる側から涙が凍ってしまいそうなくらい冷たい部屋だったよ」と、ひとりごとを言うように小さな声で言った。

後藤さんの言葉を、あとから雨がやわらかく湿らせていった。後藤さんの言葉は雨と共にこの地面に染みこんでいくように思えた。

「…だから、僕はこの花に特別な思い出があるんだ。妹が好きだった花を、自分で育てて、日本に広めたくてね…それでかなり強引に社長を説得して、今年からこの花をやらせてもらうことにしたんだ」

わたしは後藤さんの横顔に向けていた視線を、後藤さんの視線の先を辿るように花の方へ向けた。紫水色の花は雨に濡れて、優しく輝いて見えた。

「…きつと、妹さんも喜んでるんじゃないですか？」
と、わたしは言ってみた。

すると、後藤さんはちらりとわたしの方へ視線を向けると、軽く頷いて、「そうだといいね」と、静かに微笑みながら言った。

空から落ちてくる水色の粒は、地面に辿り着くと、そこに淡い水色のきれいな花をいくつも咲かせていった。辺りにはその花が咲くときの、少し水気を帯びたような、やわらかく澄んだ音がいつまでも響いていた。

結局、苦勞の末に、わたしは何とか光輝草を咲かせることができた。ある日、突然淡い黄色の蕾がついたかと思うと、わたしの見ている前で、ゆつくりと蕾が開いて花が咲いたのだ。

それは日曜日の早朝だった。早起きしたわたしが鉢植えの前に座って、じつとその蕾を見ていると、小さな黄色の蕾からまるで光が放射状に広がっていくように花が咲いたのだ。それはまるで生まれわたの希望のように思えた。

わたしはその日のうちに先生が入院している病院に花を届けにいった。そして、その花を届けてから三日もしないうちに、先生はうそのように意識を取り戻した。いくらか後遺症は残ったものの、深刻な事態には至らなかった。

あのときの花の種は、今でも大切にしまっていて、ときときそれを取り出しては先生のことを懐かしく思い出したりする。先生は今でもまだ元気にしていて、ごくたまに、絵葉書が届いたりする。

会社から帰るときになってもまだ雨は降っていた。でも、それは以前に比べるとだいぶ穏やかなものになってきているみたいだった。明日になれば、もう晴れ間が覗いているかもしれない。

結局今日は仕事がなかなか終わらなくて残業になってしまった。でも、どうしてか、それほど疲れは感じなかった。ふたつの花の記憶が、わたしの心を優しく震わせていったせいかもしれない。哀しみを含みながら、でも同時に何かを解放していくような潤いに満ちた花の記憶。

帰りの電車のなかで、ケータイにメールが届いた。それは学生時代の友達からのものだった。メールには「今度の日曜日久しぶりにみんなで会わない？」と書いてあった。わたしはその場ですぐに返事を返した。もちろん、承諾を伝える返事だ。みんなに会うのが、その瞬間から楽しみだった。

暗い電車の窓ガラスに線を描いていく雨粒を眺めながら、わたしは今日蕾をつけていたバラのことを考えていた。後藤さんの話では、明日の朝には咲いているだろうということだった。ほんとうに咲いているといいな、と思った。

明日はいつもより少し早く家を出ようと思った。そうすれば、朝日のなかで、遠慮がちに蕾を広げるバラの花を見ることができるかもしれない。

明日が待ち遠しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7058c/>

花の雫。

2010年10月11日00時29分発行